

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：14701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531059

研究課題名(和文) 教師バーンアウトを克服する教師・学校プログラムの開発研究

研究課題名(英文) A Developmental study of the teacher and school program which conquers Teacher's burnout

研究代表者

松浦 善満 (MATSUURA, Yoshimitsu)

和歌山大学・教育学部・教授

研究者番号：40243365

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では日本の教師の疲弊状況が深刻な段階に入ったとの認識に立ち従来からの教師バーンアウト研究を理論面から見直すとともに、有効性のある予防策を提言した。研究方法は、前回の研究成果であるバーンアウトの2要因(教師の自律性と同僚性の欠如・1997・松浦・八木)を逆仮説として、教師が元気に教育実践に打ち込める学校踏査を実施した。その結果、海外日本人学校における教師と、高校中退者受け入れ校の教師から、逆仮説を立証するエビデンスデータを得ることができた。その成果を調査報告書『北星学園余市高等学校調査研究「元気の学校の要件とは何か」』(2013)として発表した。

研究成果の概要(英文)：In this research, while standing on recognition that it went into the stage with a Japanese teacher's serious exhaustion situation and improving the teacher burnout research from the former from the theoretical side, preventive measures with validity were proposed. The method of research made the reverse hypothesis two factors (1997, Matsuura, and Yagi of a teacher's autonomy and coworker nature) of the burnout which is the last result of research, and the teacher carried out school exploration which can be vigorously driven into educational practice. As a result, the evidence data which proves a reverse hypothesis was able to be obtained from the teacher in an overseas Japanese school, and the teacher of the taking-in school of a high school dropout. it is investigation report "hokusei gakuen yoichi high school surveillance study about the result.some were announced as the requirements for a fine school,(2013).

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教師バーンアウト 教師の多忙と疲弊 元気の学校の要件

1. 研究開始当初の背景

ここ20年間の教師の休職者数と精神疾患を理由にする休職者数とのデータからその推移をみると、明らかに教師バーンアウト(精神疾患集)は数値的にみても深刻であること。例えば、精神疾患による休職者は平成4年度(1,111人)から平成21年度(5,458人)と17年連続して増加し、平成21年(5,407人)、22年度(5,274人)はやや減少したものの依然として高水準にある。また教師の休職比率と会社員とのそれを比較すると両者とも年々増加傾向にあるが、教師の増加率は一般会社員のその2倍近くに達している。このように教師バーンアウトの増加傾向はとどまるところを知らない。そして、この背景に何があるのか、その要因を明らかにするとともに、教師バーンアウトを克服する具体的方法を提起する任務をこの研究は背負ってきた。

教師バーンアウトの背景として、従来から指摘されてきたのは次の二点である。その一つは教職という職業が「すべての子どもを成長・発達させたいとする」教師の抱く理想と現実の教育の実際とのギャップによって、教師に挫折感を生じさせ、それが教師バーンアウトにつながるという考えだ。他の一つは、職務の多忙化によって、教師の身体的・精神的疲労が蓄積することにより教師バーンアウトが発生するとの要因論である。

前者は主として心理学的分野から検討され、後者は教育社会学分野から追及されてきた。しかしながらこれらの研究には成果も見られるものの、現実対応的な実践的モデルを示すには十分ではなかった。今回の研究は、それらの要因論を参考にしつつも、教師が比較的元気に勤務する学校をノミネートしそこにおける、プラスの背景要因を明らかにすることにより、教師バーンアウト克服のプログラム策定に寄与することを意図している。

2. 研究の目的

そこで、いままで学級崩壊やいじめ、不登校などの実態とその要因、教師の疲弊の実態等の調査を実施してきた経験をいかして、いくつかの学校に注目した。中でも、継続的に元気な学校として、海外日本人学校に注目した(具体的にはシンガポール日本人学校)。もう一つは、早くから高校中退者を受け入れ継続的に成果を上げてきた実績のある北星学園余市高等学校(北海道余市郡)をフィールドに確定し、これらの対象校からバーンアウトが少ない学校、教師の要件を明らかにするために各種調査を準備した。また、調査に当たっては従来のバーンアウト要因を仮説にするのではなく、継続的に教師が元気に活躍できる学校の要件仮説として以下の3項目に注目した。すなわち、教師バーンアウトが少ない学校には、

にされていること。・教職員の自律性が保障されていること。・教職員の同僚性が形成されていること。これらの研究仮説を実証することが本研究の目的の一つである。さらに本研究では、最終的には、そのためのプログラムを提言することである。

3. 研究の方法

1年次には、先行研究を中心に逆仮説の提案をおこなった。2年次にはシンガポールの日本人学校、ならびに北星学園余市高校にフィールド調査を実施した。3年次は、北星学園余市高校をベースに各種アンケート調査を実施しそれらの分析と同時に調査気KKを活用して同校の研修会を企画した。

なお、3年次の北星学園調査では、在校生・卒業生アンケート、保護者アンケートを実施した。また当該校の教員と共同して教員研修会(2013年1月9・10日)を企画運営した。研修会において教員との懇談の場をもつことにより、元気な学校の要件を実質的に検討し明らかにすることをめざした。

4. 研究成果

本稿は北星学園高等学校調査から得たデータ並びに知見から現代の学校改革への提言でもある。この提言を受けて同校独自の改革課題である生徒数の減少の危機を乗り越えようと努力している。ここにこれらの提言を紹介し本研究のまとめとしたい。

・提言1・まずは実態調査から

和歌山大学大学院・松浦研究室は、2012年10月同校を訪問して大規模な研究調査を実施し『北星学園余市高等学校調査報告書 元気な学校の要件は何か』(2013年2月26日刊)をまとめた。その内容は、生徒会役員、教職員、寮・ビバハウス関係者の聞き取り、生徒・保護者アンケート調査結果をまとめたものであるが、かなりていねいな聞き取りや交流を行っているので、北星余市高等学校の実態や関係者の取り組みの全容がわかる。この報告書は、生徒や教職員にどのように読まれたのかが重要なポイントであると考えるが、3年次の調査では教師間ではよく読まれ、実際に提案されている授業改革などが一部の学年で進みだしていた。

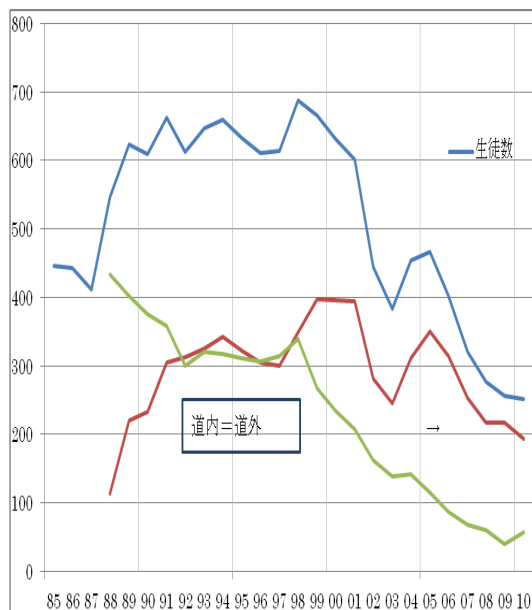
・提言2 教師と学校の危機を乗り越える

同校が生徒数の減少による学校経営の危機を意識するようになったのは1980年代の初頭ではないかと思われる。60年代の高度経済成長政策の始まりとともに高校進学率が上昇して、全国的には1960年の57.7%が65年70.7%、70年82.1%、75年91.9%となった。北海道もその例外ではなく余市町に高校設立の要望があり、本校は1965年に学校法人北星学園系列の私立高校として創設された。その頃の苦闘の歴史は、北星学園余市高等学校編『新しい学園づくりをめざして—ある私立高校十年の歩み』(1975年)北星学園余市高等学校編『学校の挑戦』(1997年)に

詳しい。地域の15歳人口や志願者数の減少のなかで、1987年に高校中退者受入れ方針を決定し、TVなどマスコミで全国的に報道された。その結果、道外からの入学者が増加し、数年後には生徒総数が600名を超える状態になった。90年代半ば、道内＝道外出身者がほぼ同数に近い時期であった。

グラフは在校生徒数が88年から上昇し、2001年くらいまで横ばい(高原状況)をしているかのように見えるが、生徒数の道内出身者・道外出身者別グラフを見ると、道内生徒数の漸減傾向は続いている。

1980年代末から漸減傾向にあったが、1988年の「中退者受け入れ」表明で道外生徒数の増加によって総数は持ち直し、2001年の「薬物事件」までは総数600名を維持していた。92-98年は「道内＝道外」の時期で各学年200名を超える生徒を確保していたが、薬物事件(2001年)前後から総入学者数が減少し、その後、漸減傾向が再び始まった。2004年に「ヤンキー先生の挑戦」



がTV放映されると道外者は一時的に増加したが、道内者は変化がなかった。このことは、北星学園余市高校に寄せる道内者と道外者の意識や期待が異なっていることを想像させる。07年には1学年100名をきる「危険水域」に入った。その後、道外の減少傾向は続いているが、逆に道内は60名前後でとどまる傾向が見られる。

このように北星学園余市高等学校は、教職員全体は活動的で、例えば、校長は年間20回以上の保護者説明会と教員研修を実施しており、大学理事会への出席なども含めプライベートな時間と休養は極めて少ない、他の教員に関しても同様に多忙であるが、休職者は過去にも数名を数えるにとどまり、バーンアウト度は低く、他方、生徒も活動的で実践の成果が上がっているように見える。(現に多くの調査研究、メディアによる多数の評価が行われてきた。)

しかし、グラフに見るように現実には、

生徒数の減少と経営上の危機を迎えており、教員の不安は相当に高いと推察できる。この点は、海外日本人学校(シンガポール校)は、生徒教師ともにバーンアウト度が低くしかも活動的であるが生徒数の減少や経営の危機は迎えていない。これら両者に見られる状況の違いを今後どのように比較検討できるのかは課題である。本研究では、このような経緯から主として北星学園余市高等学校への改革の提言を行うことにした。

・提言3 教育実践の再検討

1で少し述べたが、同校では、毎年恒例の教職員研修会が開催されている。今回は、すでに長期にわたって同校との共同研究をつづけている関西こども文化協会と共同して、2013年1月9-10日開催の研修会を企画し、アンケート調査等の分析結果報告と教職員対象のワークショップを開催した。その概要は別稿に示しているが、研修結果についてアンケートを求めたところ、返答があったのは18名中9名であった。研修内容の問題はさておき、私たちは北星余市高校の生徒募集状況や教育実践について相当な危機感をもって臨み、報告・ワークショップを実施したのであったが、研修アンケートの回答者が上記の数字であることは、現在の教職員の意識の反映ではないだろうか。そのポイントはとくに、大胆な授業改革の必要性である。よく言われるように欧米では「チョークと黒板に向かう授業は20年前に姿を消した。いまや生徒の授業参加、協同的学習が主流(佐藤学)になっており、北星の授業を観察すると、多くの授業の形態が「一斉授業」中心の授業であり生徒が受身で学習する状況も見受けられた。先ほども述べたが、2年次にこれらの点に関して提言をおこなったがさらに継続する必要があるだろう。他方、難易度の高い授業を要求する生徒もありこの要望にも応える必要があるだろう。

・提言4 バーンアウトしない学校の要件

なお海外日本人学校、ならびに北星学園余市高等学校調査から、研究の総括と今後の研究方向として、教師バーンアウトを予防する学校・教師プログラムを4点にわたって提案した。これらの諸点は今後の学校改革と教師の力量形成のポイントになると考えられる。

- 教師の専門性としての自律性と同僚性 (autonomy)
- 教師の専門性としての課題指向性(task orientation)
- 生徒指導と教科指導との統合改革 (innovation of educational skills)
- 校長の学校ビジョンとリーダーシップ (Principal's leadership and vision)

・提言5 教師の同僚性と自律性を高める学校改革

教師バーンアウトの少ない学校は、教師それぞれが自律性を有していることが特徴

である。このことは教育活動を常に振り返る自省的態度が基本にあり、状況との対話を通して教師が子どもと向き合っているため、子どもからもエネルギーを吸収できる関係を形成している。したがって、職務的に多忙であっても子どもからの見返りをうけるため元気に仕事を継続することができるのである。しかもこの自律性は孤立、あるいは自己満足ではなく、周りの教師との同僚関係によって互いに評価・承認されるために教師はさらにやりがいを高めるのである。

同僚性と自律性とは相反するようであるが実は相互に影響しあっているのである。今回の2校の調査ではこれらの結果は如実に表れたことを特記しておく。3年次は、学校現場で緊急の課題となっているいじめ問題と教師の多忙・疲弊との関係においても調査を実施し成果を上げたことを付記しておく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

松浦 善満「優しい関係(友達地獄)といじめ」(2014年2月『わかやまの教育』第51号 2~5頁) 査読: 無

松浦 善満「2014年の高校における生徒指導の課題」(2014年1月『月刊高校教育』42~45頁) 査読: 無

松浦 善満「生徒の対人関係といじめ問題」(2013年11月・『教育と医学』725号 12~19頁) 査読: 無

〔学会発表〕(計2件)

松浦 善満「いじめ問題と教員養成」(日本教師教育学会第23回大会 2013年9月19日 於: 佛教大学)

松浦 善満「いじめ問題の実態と背景」(日本教育方法学会研究集会 2013年6月22日 於: 京都大学)

〔図書〕(計1件)

松浦 善満『北星学園余市高等学校調査報告書 元気な学校の要件は何か』(和歌山大学教育学部教育実践研究室 2012年2月・全116頁)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松浦 善満 (MATSUURA, Yoshimitsu)

和歌山大学・教育学部・教授

研究者番号: 40243365

(2) 研究分担者 なし

()

研究者番号:

(3) 連携研究者 なし